

ハンガリー・ルーマニア関係（1988）

論

——社会主義国家間の難民問題——

説

荻 野 晃

は じ め に

1960年代以降のソ連を中心とした社会主義陣営内部において、ハンガリーとルーマニアにはそれぞれ独特の存在感があった。ハンガリーはソ連および社会主義陣営に忠実な外交姿勢を取りつつも、国内政治では漸進的な経済改革を継続していた。他方、ルーマニアは国内政治で国民を厳しい統制下に置きながら、ソ連から距離を置いた自主外交を推進してきた。

冷戦時代の両国はワルシャワ条約機構加盟国として同盟関係にありながらも、決して良好な関係とはいえなかった。とくに、1980年代後半には、ルーマニア国内のハンガリー系少数民族の人権をめぐる両国の関係は陰悪になった。

冷戦期のハンガリー・ルーマニア関係に関して、先行研究においては、1980年代後半のルーマニアの民族政策によって生じたワルシャワ条約機構内部で例のない激しい加盟国同士⁽¹⁾の対立が論じられてきた。筆者自身、1980年代後半のルーマニアの民族政策による二国間関係の悪化を踏まえつつも、さらに社会主義諸国間でのヒトの移動、とくにルーマニアからハンガリーへの難民の流入が、ハンガリーの内政、外交に及ぼした影響に着目している。

本稿の目的は、1988年のルーマニアからの難民の問題に焦点をあてて、

体制転換を間近にひかえた段階におけるハンガリー外交の特質を考察することにある。分析に際して、1988年2月以降にルーマニアからの難民流入に抗議して行われたハンガリー国内のデモ、11年ぶりに開催された同年8月の二国間の書記長会談、同年9月にブルガリアの首都ソフィアのハンガリー大使館に保護を求めたハンガリー系ルーマニア人への対応をめぐる二国間交渉の三点を検証する。そして、対ルーマニア交渉を通してハンガリー外交に生じた変化を論じる。

1. 1956年以後のハンガリー・ルーマニア関係

先述のとおり、1960年代以降の社会主義陣営内部におけるハンガリーとルーマニアの立ち位置は対照的であった。ハンガリーでは、1956年のソ連の軍事介入の後で政権を掌握した社会主義労働者党第一書記カーダール（Kádár János）は当初の反体制派への厳しい弾圧を経て、1960年代前半には国内統制の緩和と漸進的な自由化を開始した。他方、1958年にソ連軍の自国からの撤退を実現させたルーマニアは、1960年代に入るとワルシャワ条約機構に留まりながらも、ソ連に対して挑発的ともいえる対外政策を展開するようになった。

ルーマニア労働党書記長ゲオルギュ＝デジ（Gheorghe Gheorghiu-Dej）はソ連からの自立を模索しつつ、同時に隣国ハンガリーの国内情勢にもつねに注意を払っていた。ゲオルギュ＝デジはスターリン（J. V. Stalin）時代に権力を掌握した東欧の指導者の中で、唯一モスクワ帰りでなく国内で非合法活動に従事してきた共産主義者であった。1956年10月23日に勃発したハンガリー国民の蜂起（ハンガリー事件）の際、ゲオルギュ＝デジ政権は隣国の蜂起の自国への波及とくにトランシルヴァニア地方のハンガリー系少数民族に及ぼす影響を懸念した。そのため、クルージュ・ナボカ、バーヤ・マーレなど、ハンガリー系住民が多く住むトランシルヴァニアの主要

42(586) 法と政治 67巻2号 (2016年8月)

な都市で、ルーマニア当局は警戒を強めていたのである。

同時に、蜂起勃発後にゲオルギュー＝デジはハンガリー首相ナジ (Nagy Imre) の動向を探るため、11月3日に外務次官マルナシャヌ (Aurel Mălnășanu), 秘密警察長官ロマン (Walter Roman) をブダペシュトに派遣した。マルナシャヌには、駐ハンガリー大使を勤めた経験があった。ロマンには、ソ連亡命時代にナジと親交があった。10月30日にマルナシャヌはハンガリー国内での事態の悪化、自国への波及の可能性について本国に報告していた⁽²⁾。また、11月4日のソ連の本格的な軍事介入の後、ゲオルギュー＝デジはソ連に協力して、ナジと彼の協力者を避難先のユーゴスラヴィア大使館から誘い出すのに一役買った。ゲオルギュー＝デジは駐ルーマニア・ユーゴスラヴィア大使ヴヤノヴィッチ (Nikola Vujanović) にナジたちの身柄をルーマニアへ移すよう働きかけていた⁽³⁾。

さらに、ゲオルギュー＝デジ自身が1956年11月22日にはハンガリーを訪れて、その日のうちにユーゴスラヴィア大使館にいるナジのもとへロマン⁽⁴⁾を派遣した。ナジがユーゴスラヴィア大使館を退去する意思を固めたことは、ルーマニアから最初にソ連に伝えられた。ナジたちはソ連軍に身柄を拘束された後、ルーマニアの保養地スナゴフへ連行された。ルーマニアがナジ・グループの身柄の拘束でソ連に協力したことは、対ソ自主外交の前提条件となる1958年のソ連軍撤退の実現へ向けた布石となったのである。

1960年代以降、ハンガリーとルーマニアは疎遠な関係にありながら、ワルシャワ条約機構内部で相互補完的な立場にあったともいえる。中ソ対立が激しくなると、ルーマニアはいわば「チャイナ・カード」を駆使して、対ソ自立を進めた。ルーマニアの対ソ自主外交の契機となったのは、1960年代初頭にソ連共産党第一書記フルシチョフ (Nikita S. Khrushchev) が進めた経済相互援助会議 (COMECON) 内部の国際分業であった。分業が徹底された場合、ルーマニアは農業国の地位に甘んじることになった。ルー

マニアがソ連離れを始めたのと同じ時期、カーダールの下でハンガリーは国内統制の緩和に踏み切った。すると、ルーマニアが警戒するハンガリーの国内政治の自由化を、ソ連は容認することになった。そして、ルーマニアがソ連に挑発的な外交を展開すれば、ハンガリーは内政上の自律性を確保できた。その結果、ソ連、ハンガリー、ルーマニアの三カ国の間で、独特の地域パワーバランスが形成されたのである。

1965年以降のハンガリー・ルーマニア関係に関して、ノヴァーク (Novák Csaba Zoltán) はカーダールとゲオルギュ＝デジの後継者であるルーマニア共産党 (1965年に党名を変更) 書記長 チャウシェスク (Nicolae Ceaușescu) との指導者間の関係に焦点をあてて、①1960年代後半から1970年代前半、②1970年代後半から1980年代前半、③1980年代後半以降の3段階に分けて論じた。⁽⁵⁾

①の段階で、カーダールはルーマニアとの関係強化を望んでおり、二国間に存在する問題の解決を意図していた。1972年2月に首脳会談が開催されたが、二国間の協力は進展しなかった。ハンガリー本国と自国のハンガリー系少数民族との結びつきが強まることを歓迎しないルーマニアは、ハンガリーとの話し合いに消極的であった。

②の段階でも二国間関係の強化は進展せず、ルーマニアの国内政治がネオ・スターリニズムといわれるくらいに硬直化していった。カーダールもチェウシェスクとの直接の会談を回避するようになった。実際、1977年6月15日から16日のオラデア、デブレツェンでの会談以降、両者による首脳会談は開催されなかった。オラデア、デブレツェンの会談で、チェウシェスクは自国の対米、対中外交の成果を語り、両国の党の国際問題での協力について強調した。しかし、カーダールの反応は否定的であった。⁽⁶⁾

③の段階に至っては、ルーマニア国内でハンガリー系少数民族への抑圧が強まり、ハンガリー・ルーマニア関係は次第に陰悪化していった。カー
44(588) 法と政治 67巻2号 (2016年8月)

ダールが関係修復への行動を起こすことはなかった。結局、カーダール時代、ルーマニアをはじめ近隣諸国のハンガリー系少数民族の問題はタブーのままだった。

さらに、チャウシェスクは農村改造を意図して、近代化に取り残されながらも貴重な伝統文化の残るトランシルヴァニア地方の農村の破壊を始め⁽⁷⁾た。その結果、多くの人々が難民となってハンガリーに流入した。ハンガリーへやってきた難民は、1985年に1709人、1986年に3284人、1987年に6449人と年々増加の一途をたどった。また、ハンガリー系で西側諸国への出国を意図した難民の数は、1985年に200人、1986年に351人、1987年に928人であった。また、ルーマニアの旅行証明書で合法的にハンガリー⁽⁸⁾に入国した人々の多くも帰国の意思を持たなかった。難民は民族としてハンガリー人、ルーマニア人、ドイツ人に分類された。だが、大半はハンガリー系少数民族であった。隣国の同胞が難民となって自国へ流入する中で、ハンガリー国内ではチャウシェスク政権への反発が強まった。

2. ハンガリー国内の抗議デモ

1985年3月にソ連共産党書記長に就任したゴルバチョフ（Mikhail S. Gorbachev）がベレストロイカ、新思考外交を打ち出すようになると、ハンガリー、ルーマニアを取りまく国際環境にも変化が生じた。ゴルバチョフが書記長就任段階で同盟国の内政に干渉しないことを表明していたと、旧ソ連の一次史料を検証したハンガリーの歴史家バラート（Baráth Magdolna）は指摘する。同時に、東欧の自立の拡大には、自国の改革の後⁽⁹⁾に続く指導者の存在をゴルバチョフは条件づけていた。

1986年5月のソ連共産党政治局の協議において、ゴルバチョフは社会主義諸国との新しい関係の原則として、国家主権や独立の尊重に加えて、真の平等、立場の一致、社会主義世界の発展のための共通の責任について

述べていた。⁽¹⁰⁾

ゴルバチョフが中距離核戦力（INF）の全廃など西側との関係改善を進めると、ルーマニアの自主外交路線は存在価値を失った。その結果、経済の不振と相俟って、ルーマニア国内ではナショナリズムが鼓舞された。ゴルバチョフは旧態依然とした東欧の指導者への批判をひかえていたにもかかわらず、1987年5月にルーマニアを訪問した際にチャウシェスクを批判していた。⁽¹¹⁾ 国際社会では、少数民族の人権侵害に対するルーマニア批判が強まった。例えば、アメリカはルーマニアへの最恵国待遇を停止した。⁽¹²⁾

他方、経済危機が深刻化する中で、ハンガリー国内では高齢化したカーダールの指導力の低下が明確となった。また、カーダール政権はルーマニアからの難民の問題にも有効に対処できなかった。ゴルバチョフがペレストロイカを東欧諸国へ波及させる際、最初に意図したのはカーダールの書記長（1985年に名称変更）辞任と社会主義労働者党指導部の刷新であった。ゴルバチョフはカーダールの実績に敬意を払いつつ、円満な形での退陣を求めたのである。しかしながら、カーダールはゴルバチョフの忠告に耳を貸さなかった。

ソ連の東欧への干渉がなくなった結果、先述の1960年代に形成された地域パワーバランスが崩れた。ハンガリーでは、ソ連の統制が緩むと、いっそうの改革を求める機運が高まった。他方、ルーマニアでは、国内政治がさらに硬直化した。その結果、ハンガリー・ルーマニア関係はさらに悪化していった。

1988年2月1日、ブダペシュトのルーマニア大使館前でハンガリー系少数民族への人権侵害に抗議するためのデモが開催された。社会主義陣営内部において同盟国の在外公館前で公然と抗議デモが行われたこと自体、異例であったことはいうまでもない。ルーマニアは自国の大使館前で抗議行動に激しく反発した。2月2日、駐ハンガリー・ルーマニア大使ヴェ
46(590) 法と政治 67巻2号（2016年8月）

レシュ (Nicolae Veres)⁽¹³⁾ がハンガリー外務省にデモについて抗議した。ヴェレシュはハンガリー当局のデモへの関与を示唆した。無論、ハンガリー外務省は当局の関与を否定した。翌3日にも、ルーマニア外務次官ワンチャ (Constantin Oancea) が駐ルーマニア・ハンガリー大使スーチ (Szűts Pál)⁽¹⁴⁾ と会談した。ハンガリー当局がデモを許可したとワンチャは非難した。

2月8日にチャウシェスクが演説の中で、外国からの自国への内政干渉⁽¹⁵⁾に言及した。チャウシェスクはデモを取り締まらなかったハンガリーを暗に批判したのである。

2月27日、スーチがルーマニア外務省にハンガリー当局のデモへの対応、ハンガリーの立場を説明した。そして、スーチは「デモへの警察の対応は適切であり、ルーマニア側の批判には根拠がない⁽¹⁶⁾」と反論した。ハンガリー当局には、参加者による大使館への侵入や破壊行為がなされない限り、ルーマニアへの抗議デモを容認する用意があった。当初、スーチは外相トトゥ (Ion Totu) との会談を求めたが、多忙を理由に断られていた。ルーマニア側のデモに対する激しい反発ぶりがうかがえる。

難民の流入で二国間関係が悪化する一方で、両国の党の間では対話を模索する動きもあった。4月27日、ハンガリー社会主義労働者党は対ルーマニア関係について21点の提案を行っ⁽¹⁷⁾た。社会主義労働者党は1987年6月4日から5日に開催された両国の党中央委員会書記会談の前例に従⁽¹⁸⁾って、ルーマニア共産党との党中央委員会書記会談を提案したのである。同会談に出席していた外交担当の党中央委員会書記スールシュ (Szűrös Mátyás) は、1988年1月25日にラジオでルーマニアからの難民について「ハンガリーは倫理的、政治的、人権上の理由で責任を負っており、国境の外に住むハンガリー人のために行動する⁽¹⁹⁾」と述べていた。しかしながら、21点の提案では、ルーマニアのハンガリー系少数民族の権利擁護について言及されなかった。ハンガリー側が挙げた21点の提案とは、経済や河

川の利水での二国間協力、在外資産の権利の擁護、文化・学術交流などからなっていた。

他方、ルーマニアはハンガリーとの首脳会談の可能性を視野に入れていた。すでに、カーダールは党内の求心力を失っており、書記長の交代が不可避の状況であった。5月9日にルーマニア共産党中央委員会も社会主義労働者党中央委員会宛てに送付した書簡の中で、チャウシェスクとカーダールの後継者による書記長会談も視野に入れた両国の党の高いレベルでの話し合いを提案した。⁽²⁰⁾

両国の間で対話の動きがあったにもかかわらず、ハンガリー国内では、ルーマニアに対する抗議デモが繰り返り起きていた。デモの計画を把握したルーマニア大使館は、数度にわたりハンガリー外務省にデモの中止を要請した。とくに、ルーマニア政府は6月27日頃に予定されているルーマニア大使館前のデモを禁止するよう強く求めた。だが、ハンガリー外務省はデモを阻止する意思を明確にしなかった。6月22日、ルーマニア共産党中央委員会書記ストヤーン（Ion Stoian）はスーチと会談し、ハンガリーによる自国への内政干渉を非難した。さらに、ストヤーンはハンガリー国内での反ルーマニア報道を理由に、両党の中央委員会書記による会談の提案を拒否した。⁽²¹⁾

社会主義労働者党指導部にとって、ルーマニアからの難民の問題を契機としてナショナリズムに訴えることは、すでに政治的な意図で組織化を始めている民主フォーラムなど左野団体の動きをさらに活発化させることになり得策とはいえなかった。また、自発的に人道目的による抗議行動が行われるほど、すでにハンガリー国内では自由化が進行していたのである。

ルーマニア側が両党の中央委員会書記会談の開催を否定した後、両国の間で非難の応酬が始まった。6月24日には、ハンガリー外務省はキラ（Ioan Chira）代理公使にデモを支持しないが、禁止もしないとの立場を示
48(592) 法と政治 67巻2号（2016年8月）

した。翌25日、トトゥがスーチを外務省に呼んで、デモへのハンガリーの姿勢を批判した。⁽²²⁾

4,000人ともいわれる1956年以降に最大規模の自発的なデモ当日の27日、ハンガリー外務次官エーシ（Őszi István）が25日のルーマニアからの批判に対して、ハンガリーの姿勢を「反ルーマニア、反社会主義、イレデンティズム⁽²³⁾ではない」と反論した。

両国の間で激しい批判が繰り返された後、6月28日にブカレストでトトゥとワンチャがスーチを外務省に呼んで、次の2点を通告した。1. クルージュ・ナポカのハンガリー総領事館の閉鎖と館員の48時間以内の国外退去、2. ブダペシュトの大使館の活動が必要かどうかはハンガリーの対応次第である。ルーマニアの立場からは、二国間関係悪化のすべての責任がハンガリー側にあったことはいうまでもない。⁽²⁴⁾

6月30日、ハンガリー外務省はルーマニアによるデモへの批判、総領事館閉鎖の命令に抗議した。⁽²⁵⁾ハンガリーにとって、トランシルヴァニア地方のハンガリー系少数民族との交流、権利の擁護をはかるうえで、クルージュ・ナポカの総領事館の存在は貴重であった。ハンガリーは報復措置として、デブレツェンにあるルーマニア総領事館の閉鎖を命じたのである。

3. アラド会談

1988年の夏以降も、ハンガリー国内ではルーマニアに対する抗議行動は続いた。ルーマニア大使館はハンガリー外務省にデモの禁止を要請していた。⁽²⁶⁾しかし、その一方で、8月25日にルーマニアから首脳会談の提案があった。社会主義労働者党政治局はルーマニアの提案を受け入れた。⁽²⁷⁾デモをめぐる双方の非難の応酬が続いたにもかかわらず、1988年5月20日から22日の社会主義労働者党全国会議でのカーダールの書記長辞任を機に、1977年以来開催されていない両党の書記長による首脳会談を求め

る動きもあった。書記長に就任したグロース（Grósz Károly）にとって、ルーマニアからの難民の問題は重要な政治課題であった。他方、ブカレストのスーチ大使など、拙速な首脳会談の開催に慎重な意見も外務省内に存在していた。⁽²⁸⁾

グロースは7月4日から5日にソ連を訪問し、ゴルバチョフと会談していた。会談の席で、グロースはルーマニアとの関係悪化について言及した。グロースはゴルバチョフの支持を得ることを期待した。にもかかわらず、ゴルバチョフは内政不干渉の立場を取り、グロースにルーマニアとの対話の必要性を説くにとどまった。⁽²⁹⁾

ゴルバチョフから対ルーマニア関係で明確な支持を得られなかったグロースは、チャウシェスクとの指導者同士の対話による事態の打開をめざした。カードールの書記長辞任の後で政治局入りを果たした急進改革派の旗手ポジュガイ（Pozsgay Imre）は、難民の支援に積極的でルーマニアへの反発を強める在野団体の民主フォーラムと連携していた。グロースにとって、ポジュガイの党内外での支持の拡大は自身の国内基盤を強化するうえで望ましくなかった。

他方、リガチョフ（Egor K. Ligachyov）などソ連共産党内の守旧派がグロースにチャウシェスクとの話し合いを強く求めていたと、当時、社会主義労働者党中央委員会国際部で対ルーマニア政策に関与したソカイ（Szokai Imre）は指摘している。⁽³⁰⁾

グロースとチャウシェスクとの首脳会談は、8月28日にルーマニアのアラドで開催された。11年ぶりに二国間で開催されたにもかかわらず、首脳会談の内容は具体性に乏しいものであった。とくに、ルーマニアのハンガリー系少数民族にとって、アラド会談は失望以外の何ものでもなかった。

グロースが会談の冒頭で「両国の好ましくない関係は双方に同等の責任
50(594) 法と政治 67巻2号（2016年8月）

がある」と述べたことを、ハンガリーの政治史研究者フェルデシュ (Földes György) は過ちだったと指摘する。会談の際、ルーマニアの民族政策に関して、ハンガリーには領土要求はなく、人権や母語の自由な使用を求めるとグロースは述べた。他方、難民の問題はルーマニアでなくハンガリーの国内問題であり、ルーマニア当局は自国民の不法な越境の阻止に努めているとチャウシェスクは強調した。さらに、チャウシェスクはハンガリーの内政干渉を理由に、ハンガリーが要求した農村改造への現地調査やクルージュ・ナポカの総領事館の再開を拒否した。さらに、チャウシェスクはハンガリーの改革を「資本主義化」と批判した⁽³¹⁾。会談の主導権は、終始、チャウシェスクに握られていた。グロースにとって、自身の政権基盤を強化するための外交上の成果は得られなかった。

9月4日には、ルーマニア共産党機関紙『スクインティア』がハンガリー批判を再開した。同紙の記事では、ハンガリーの経済改革について「ルーマニア民族の勤労者にとって耐えがたい状況をつくりだす」と述べられていた⁽³²⁾。

9月8日にハンガリー外務次官ホルン (Horn Gyula) がソ連を訪問して、ゴルバチョフの外交顧問ザグラジン (Vadim V. Zagladin) と会談した。ソ連がルーマニアとの問題で自国を支持しないことに、ホルンは不満を持っていた。ゴルバチョフが1987年5月のルーマニア訪問の際にチャウシェスクにレーニン勲章を与えたことに言及し、ソ連の外交姿勢がルーマニアの立場を強化しているとホルンは批判した⁽³³⁾。

アラド会談の後、ハンガリー国内では、グロースへの批判が強まった。在野知識人と連携したボジュガイは、公然とアラド会談への不満を表明した⁽³⁴⁾。また、民主フォーラムがアラド会談に失望してグロースの辞任を要求していた。

9月20日には、スールシュがブカレストでストヤーンと会談した。ス

トヤーンはアラド会談での合意の履行について協議したいと述べた。スールシュは何ら合意に達していない、「手ぶらで帰国させるのか」と反発した。さらに、チャウシェスクはスールシュに「グロースには外交経験が乏しい」と述べた⁽³⁵⁾。国際的な批判が強まりつつあるとはいえ、これまで自主外交を展開してきたチャウシェスクに対して、首脳会談で事態の打開をはかろうとしたグロースの認識が甘かったことは否定できない。アラド会談がハンガリー側の外交的敗北に終わったことは、誰の目にも明白だった。

4. ソフィアでのハンガリー系ルーマニア人亡命問題

アラド会談の後、ハンガリーへ非合法な越境を試みる者が一週間に400名に増加していた⁽³⁶⁾。そのような状況下の9月14日に、ハンガリーへの亡命を求める12名のハンガリー系ルーマニア人がブルガリアの首都ソフィアのハンガリー大使館に保護を求めた。9月25日、スーチはルーマニア外務省でトトゥ、ワンチャに会った。スーチは彼らをブダペシュトへ移送することを提案した。スーチの提案に対して、12名は一度帰国した後で出国を申請すれば許可を得られるとトトゥは返答した。反対に、ハンガリー側に関係修復の意思があるのかとトトゥはスーチに問い質した⁽³⁷⁾。

9月25日の夕方17時に、スーチは再びトトゥと会談した。トトゥはスーチに、次のような自国の立場を示した。⁽³⁸⁾1. ルーマニアはソフィアからブダペシュトに移送するハンガリーの提案に応じない、2. ルーマニアはソフィアのハンガリー大使館にいるルーマニア国籍の人間を帰国させることを要求する、3. ルーマニア国籍の人間には、ルーマニアの国内法と（ハンガリーとの）二国間協定にもとづいて一度帰国してから出国を求める権利がある、4. ルーマニアは二国間関係の修復の道を探っている。

後述するが、冷戦期に東欧諸国の間では、法律に違反した旅行者を送還させる二国間の協定が存在していた。トトゥはハンガリー大使館に不法滞

在する自国民の送還を要求したのである。

9月26日にはハンガリー外務省がルーマニア大使館のキラ参事官にソフィアの亡命希望者に関して、平和的に大使館から退去できるよう求める書簡を送付した。同日、ハンガリー外務省はブダペシュトのブルガリア大使館の参事官トシェフ（Lio Toshev）⁽³⁹⁾にも同様の書簡を送付した。

9月27日のルーマニア外務省の返答には、ソフィアのハンガリー大使館はルーマニア国籍の人間をブルガリア当局に引き渡す、ブルガリアは彼らをルーマニアへ送還する、その後でルーマニアの法律にもとづいて短期間のうちにハンガリーへ出国させる内容の提案が記されていた。⁽⁴⁰⁾

ハンガリー側が求めた「平和的な大使館からの退去」とは、ブルガリアからルーマニアを経由しないハンガリーへの移送を意味した。ソフィアのハンガリー大使館に保護を求めた12名が、ルーマニアが要求した一次的な帰国に応じなかったことはいうまでもない。さらに、ハンガリーにとって、自国への亡命を求めて在外公館に逃げ込んだ人々をルーマニアの要求に応じて送還させることは、国際社会から激しい非難をあびることを意味した。アラドの首脳会談で何ら成果をあげられなかったグロース政権は、ルーマニアから流入する難民の問題解決のために国際社会からの支持を必要としていたのである。

9月28日には、ブダペシュトでキラがエーシに書簡を送付して、早期に12名を大使館から退去させるよう要求した。ルーマニアが約束通りに大使館からの退去後にハンガリーへの出国を許可するとは考えられないとエーシは反論した。⁽⁴¹⁾

早くも二国間の交渉は膠着状態に陥った。10月3日にエーシは9月28日のキラからの書簡に回答した。エーシの回答には、送還に応じないハンガリーの立場として「ルーマニアはハンガリーへの出国を文書で保証していない」と記されていた。⁽⁴²⁾だが、かりに、ルーマニアが出国を文書で保証

したとしても、ハンガリーは人道的な見地から12名を帰国させるわけにはいかなかった。

ハンガリーはブルガリアの協力を得て、ルーマニアに送還することなくハンガリー系ルーマニア人たちの自国へ移送しようと試みた。同日、エーシは駐ハンガリー・ブルガリア大使コツェフ（Venelin Kocев）とも会談し、ルーマニアとの二国間協議の決裂を通告して、第三国に出国させた後で国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）に12名の身柄を引き渡すことへの理解を求めた。⁽⁴³⁾

ソフィアでの難民問題の発生当初から、ルーマニアはブルガリアに二国間協定にもとづく不法滞在者への厳しい対処を求めている。ルーマニアが主張する「二国間協定」とは何か。冷戦時代に東欧諸国の間では、二国間の観光ヴィザの免除に関する協定が締結されていた。協定によれば、一方の締結国の国民は相手国に30日間滞在可能で、相手国の大使館、総領事館が同意した場合のみ滞在期間の延長が可能であった。また、一方の締結国の旅行者が相手国の法律に違反した場合、相手国は旅行者の滞在許可を取り消して帰国させることができるという内容だった。⁽⁴⁴⁾

ブルガリアにとって、ゴルバチョフの登場以降に東西間の緊張緩和が進展する中で、上記の内容の二国間協定にもとづいて12名のハンガリー系ルーマニア人を送還することは難しくなっていた。しかし、その一方で、難民条約に加盟していないブルガリアはUNHCRへの引き渡しを前提とした12名の出国を容認しなかった。10月4日にコツェフはホルンに対して、直接のハンガリーへの出国、第三国への出国のいずれにも応じられないと回答した。⁽⁴⁵⁾

にもかかわらず、ルーマニアとの二国間交渉に見切りをつけたハンガリーは、ブルガリアへのはたらきかけを継続した。10月26日、ハンガリー外務省はコツェフにソフィアでの難民問題解決のための書簡を手渡した。書

54(598) 法と政治 67巻2号（2016年8月）

簡の内容は、ハンガリーが12名の出国に対して責任を負って秘密裏に解決⁽⁴⁶⁾するのを、ブルガリア当局が容認するよう求めるものであった。

10月28日から29日に、ブダペシュトでワルシャワ条約機構の外相会談が開催された。28日にハンガリー外相ヴァールコニ (Várkonyi Péter) がブルガリア外相ムラデノフ (Petar Mladenov) と会談し、ソフィアのハンガリー系ルーマニア人難民12名のユーゴスラヴィア経由でのハンガリー出国への協力を求めた。ムラデノフからの提案は、次の2点であった。1. (ブルガリア・ルーマニア国境を流れる) ドナウ川を航行する船舶でソフィアの12名をハンガリーへ送る、あるいは2. 航空機でソフィア・ブカレスト・ブダペシュトの経路で12名を出国させる。ヴァールコニはトトゥにムラデノフの提案を伝えた。にもかかわらず、トトゥはあくまでルーマニア国籍を有する12名を一度帰国させた後で、ハンガリーへの出国を許可⁽⁴⁷⁾する立場に固執した。

11月9日にもヴァールコニはムラデノフに書簡を送り、ソフィアの難民12名の出国を促した。だが、ブルガリアの反応は好意的でなかった。⁽⁴⁸⁾

11月11日に新たにブダペシュトに着任したルーマニア大使ポプ (Traian Pop) がヴァールコニにあらためて従来のルーマニア側の立場を伝えた。会談の際、ポプは口頭で帰国した後の12名を罪に問わないことを保証した。14日にも、ブカレストでワンチャがスーチに同様の発言をしてい⁽⁴⁹⁾た。

ルーマニアが12名を一度帰国させる原則的な立場を崩さず、ブルガリア当局も彼らのルーマニアを経由しない出国を容認しない状況にあって、ハンガリーは国際赤十字など国際機関の旅行証明書で12名の第三国、具体的にはスイスカオーストリアへの出国を模索していた。11月14日から18日にハンガリーの要請で国際赤十字の代表がソフィアを訪れていた。11月23日、ハンガリー赤十字社が書簡でブルガリア赤十字社に協力を要請

した。さらに、12月9日から10日にハンガリー赤十字社長ハントシュ（Hantos János）がブルアリア赤十字社長イグナトフ（Kiril Ignatov）と会談した。⁽⁵⁰⁾すでに、ソフィアの難民問題は国際赤十字の関与による解決の道が開かれつつあった。最終的に、1989年2月17日に12名のハンガリー系ルーマニア人は国際赤十字の旅行証明書を携えて、ブルガリアを出国して空路でオーストリアのウィーンへ向かった。⁽⁵¹⁾

国際赤十字の仲介による第三国経由での自国民のハンガリー亡命の動きを、ルーマニアも早い段階で察知していた。国際赤十字の代表のソフィア訪問直後の11月19日、ブカレストのハンガリー大使館のジェールフィ（Győrfi Károly）参事官が「ペルソナ・ノン・グラータ（好ましくない人物）」として3日以内の国外退去を命じられた。ルーマニア側はハンガリーによる国際赤十字へのはたらきかけをジェールフィの国外退去の理由として挙げていなかった。だが、ルーマニアにとって、ジェールフィ追放が自国を排除した形でソフィアの難民問題の解決を模索するハンガリーへの抗議の意思であったことは明らかである。ハンガリー外務省はキラ代理公使へ抗議文を手渡した。ルーマニア大使館はハンガリーからの抗議に自国の内政問題であるとの立場で反論した。11月24日、ハンガリーは報復措置としてルーマニア大使館のプラトナ（Pavel Platona）参事官に国外退去を命じた。⁽⁵²⁾

ハンガリー・ルーマニア間の対立は1988年6月の双方による総領事館の閉鎖に続いて、同年11月には外交官の相互追放にまで至ったのである。

お わ り に

1960年代以降、ハンガリーとルーマニアが社会主義陣営の内部で独自の立場を維持してきた。しかし、1980年代後半、両国およびソ連との間で保たれてきた地域パワーバランスに変化が生じた。ゴルバチョフの新56(600) 法と政治 67巻2号（2016年8月）

思考外交は、ルーマニアの対ソ自主外交のレーゾンデートルを喪失させた。その結果、チャウシェスクは民族主義色を強め、国内の少数民族を圧迫した。他方、経済危機が深刻化する中で抜本的な改革を否定したカーダールは、社会主義労働者党指導部の刷新を求めるゴルバチョフとの確執の末に書記長辞任に追い込まれた。そして、ルーマニアの国内政治の硬直化に伴う難民の発生は、ハンガリー・ルーマニア関係をさらに悪化させた。

1988年5月に書記長に就任したグロースにとって、1980年代後半に急増したルーマニアからの難民の問題への対処は、自身の政権基盤を左右しかねない経済危機の打開と並ぶ重要な課題であった。すでに、ハンガリー国内では、ルーマニアに対する抗議行動が公然と行われていた。そのため、国内に慎重な意見が存在したにもかかわらず、カーダールが忌避してきたチャウシェスクとの首脳会談の開催にグロースは同意した。しかし、チャウシェスクとのアラド会談が具体的な成果なしに終わると、反対にルーマニアからの越境者が増加した。チャウシェスクとの対話が、グロース個人の政権基盤の強化に寄与することはなかった。アラド会談は外交上の敗北にとどまらず、党内外でグロースの求心力の低下を招いたのである。

アラド会談の結果、グロースにとって、ルーマニアからの難民の問題は国際社会での支持や西側諸国の支援を得る以外に対処すべき選択肢がなくなった。さらに、ソフィアのハンガリー大使館に保護を求めたハンガリー系ルーマニア人の出国問題で、ルーマニアとの関係は決定的に悪化した。ハンガリーが欧米の支援を得るためには、国内でさらなる政治的な自由や人権を保証することが不可欠だった。にもかかわらず、グロースにとって、民主化の推進が党内でポジュガイなど急進改革派の台頭による自身の権力基盤の弱体化につながるものが懸念された。対ルーマニア外交におけるグロースの躓きが、1989年の体制転換への動きを加速させる一因になったとさえいえる。

グロースの政治的な意図にかかわらず、ソフィアのハンガリー系ルーマニア人の亡命事件は、ハンガリーがルーマニアから流入する難民の問題で UNHCR や国際赤十字などの国際機関の支援を得るため、1989年3月に「難民の地位に関する条約」（難民条約）加盟に踏み切るうえでの重要な契機となった。ルーマニアからの難民流入というヒトの移動が、近隣諸国のハンガリー系少数民族への支援、西側諸国への接近、人権の尊重という形で、1989年の体制転換期のみならず、その後のハンガリー外交にも及ぼした影響を過小評価すべきではない。実際に、難民条約加盟からまもない時期に発生した西ドイツへの出国を求めて自国に殺到した東ドイツ人への対応で、体制転換期のハンガリー外交の真価が問われることになったのである。

【付記】本稿は、平成25～27年度科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）の研究課題「ハンガリーの体制転換（1989）と国際環境の史的考察」の研究成果の一部である。

注

- (1) Földes György, *Magyarország, Románia és a nemzeti kérdés・1956-1989* [ハンガリー、ルーマニア、民族問題 1956-1989年] (Budapest: Napvilág Kiadó, 2007); Béla Révész, “„Out of Romania!” Reasons and Method in State Security Documents 1987-1989,” *Regio*, 11, 2008, pp. 8-66; Novák Csaba Zoltán. „Barátságra ítélve.” Kádár János és Nicolae Ceaușescu [「友好を宣告されて」カーダール・ヤーノシュとニコラエ・チャウシェスク]. In Szerk.: Földes György-Mitrovits Miklós. *Kádár János és a 20. századi magyar történelem* [カーダール・ヤーノシュと20世紀ハンガリー史] (Budapest: Napvilág Kiadó, 2012), 147-167. o.; Kaszás Veronika, *Erdélyi menekültek Magyarországon 1988-89* [ハンガリーにおけるトランシルヴァニア難民 1988-89年] (Budapest: Gondolat, 2015).
- (2) 1956年10月30日のマルナシャヌの本国宛ての報告（ハンガリー語訳）は、Szerk.: Pál Lajos és Vida István. *Magyar-román kapcsolatok 1956-1958: Dokumentumok* [資料集 ハンガリー・ルーマニア関係 1956-1958年]

- (Budapest: Paulus Publishing Bt-Nagy Imre Alapítvány, 2004), 126.o.
- (3) ハンガリーの雑誌『タールシャダルミ・セムレ』に掲載された1956年12月1日のルーマニア労働党政治局の議事録（ハンガリー語訳），Közlő: Kiss László, Varga Andrea. Dokumentumok: „Kádár kérte, segítsünk mi is...” a Nagy Imre-csoport elrablása és deportálása Romániába 1 [資料:「カーダールがわれわれにも助けを求めてきた…」—ナジ・イムレ・グループの拉致とルーマニア連行 1]. In: *Társadalmi Szemle*, 52, 10, 1997, 93.o. ハンガリー事件当時のルーマニアの対応は，Vida István, “Miért Románia?: A Nagy Imre-csoport deportálása [何故ルーマニアが? —ナジ・イムレ・グループの拉致],” *Rubicon*, 1993, 7, 25-26.o. を参照。 説
- (4) ハンガリーに派遣されていたソ連共産党政治局マレンコフ（Georgy M. Malenkov），スースロフ（Mikhail A. Suslov），アリストフ（Averkin B. Aristov）がソ連共産党中央委員会に宛てた報告（1956年11月23日），Szerk.: Vjacseszlav Szereda, Alekszandr Sztikalin. *Hiányzó lapok 1956 történetéből: Dokumentumok a volt SZKP KB levéltárából* [1956年の歴史から見つからないページ—旧ソ連共産党中央委員会資料集]（Budapest: Móra Ferenc Könyvkiadó, 1993），237-238.o.
- (5) Novák Csaba Zoltán, i. m., 149-163.o.
- (6) カーダール・チャウシヤスク会談の内容は，社会主義労働者党政治局への報告書（1977年6月30日），Szerk.: Földes György. *Kádár János külpolitikája és nemzetközi tárgyalásai 1956-1988 II.: Válogatott dokumentumok* [カーダール・ヤーノシュの対外政策と国際交渉 1956-1988年 2巻—厳選された資料集]（Budapest: Napvilág Kiadó, 2015），457-466.o. を参照。
- (7) 1988年4月29日，チャウシヤスクは2000年までに農村改造の計画を終わらせると発表した。Szerk.: Nagy Miklós. *A magyar külpolitika 1956-1989: Történeti kronológia* [ハンガリー外交 1956-1989年—歴史年表]（Budapest: MTA Jelenkorkutató Bizottság, 1993），265.o.
- (8) 社会主義労働者党政治局議事録（1988年2月9日），*Magyar Nemzeti Levéltár Országos Levéltár* [ハンガリー国立公文書館]（以下，MNL OL と略記）M-KS 288 f. 5/1019 ő.e.
- (9) Baráth Magdolna, *A kreml árnyékában: Tanulmányok Magyarország és a Szovjetunió kapcsolatainak történetéhez, 1944-1990* [クレムリンの影で—ハンガリー・ソ連関係史研究 1944-1990年]（Budapest: Godolat, 2014），281-282.o. ハードマン（Helen Hardman）は類似したゴルバチョフの対東欧姿勢を「ペレストロイカの輸出」だと論じている。Helen Hardman, *Gorbachev's*

Export of Perestroika to Eastern Europe: Democratisation Reconsidered (Manchester and New York: Manchester University Press, 2012). ムサトフ (Valeri V. Musatov) もゴルバチョフの対東欧姿勢について「小ゴルバチョフ」の権力掌握への努力と呼んでいる。Valerij Muszatov, “Gorbacsov politikájának metamorfózisa és a szocialista országok [ゴルバチョフの政策の変容と社会主義諸国],” *Történelmi Szemle*, 2009, 1, 136. o.

- (10) Uo., 131. o.
- (11) Baráth Magdolna, i. m., 283. o.
- (12) Földes György, *Magyarország, Románia és a nemzeti kérdés · 1956-1989*, 414. o.
- (13) ヴェレシュの抗議は、ハンガリー外務省の記録文書（1988年2月2日）, *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-151 00718 1988* (85.doboz).
- (14) ブカレストのハンガリー大使館の本国外務省宛ての暗号電報（1988年2月3日）, *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-151 00718/1 1988* (85.doboz).
- (15) ブカレストのハンガリー大使館の本国外務省宛ての暗号電報（1988年2月8日）, *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-14 00906 1988* (85.doboz).
- (16) ブカレストのハンガリー大使館の本国外務省宛ての暗号電報（1988年2月27日）, *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-151 00718/3 1988* (85.doboz).
- (17) ハンガリーの提案はハンガリー外務省の暗号電文（1988年4月27日）, *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-14 00906/4 1988* (85.doboz).
- (18) 1987年6月のハンガリー・ルーマニアの党中央委員会書記会談では、ルーマニア側がハンガリー科学アカデミーで公刊された『トランシルヴァニア史 (Erdély története)』をルーマニア人の尊厳を傷つけるものだと激しく批判していた。Gábor Vincze, *A Historical Chronology of the Hungarian Minority in Romania 1944-1989* (Budapest: Partium Press, 2009), p. 219.
- (19) Szűrös Mátyás, *Cselekvő politikával a magyarságért: Politikus portré* [ハンガリー人のために行動する政治によって一政治家の肖像] (Budapest: Heraldika, 1997), 71. o.
- (20) ルーマニアの提案はブカレストのハンガリー大使館の本国外務省宛ての暗号電報（1988年5月9日）, *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-13 002402 1988* (85.doboz).
- (21) キラ代理公使との会談に関するハンガリー外務省の記録文書（1988年6月21日）, *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-151 00718/6 1988* (85.doboz); ストヤーンの発言に関しては、ブカレストのハンガリー大使館の本国外務省宛ての暗号電報（1988年6月22日）, *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-25*

- 002967/1 (86.doboz); Szűts Pál, *Bukaresti napló 1985-1990* [ブカレスト日記 1985-1990年] (Budapest: Osiris, 1998), 129-130.o.
- (22) Uo., 132.o.
- (23) デモをめぐる両国での非難の応酬は、キラとの会談に関するハンガリー外務省の記録文書 (1988年6月24日), *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-151 00718/7 1988* (85.doboz); ブカレストのハンガリー大使館の本国外務省宛ての暗号電報 (1988年6月25日), *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-151 00718/8 1988* (85.doboz); キラとの会談に関するハンガリー外務省の記録文書 (1988年6月27日), *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-151 00718/9 1988* (85.doboz).
- (24) クルージュ・ナポカのハンガリー総領事館の閉鎖をめぐるやり取りは、ブカレストのハンガリー大使館の本国外務省宛ての暗号電報 (1988年6月27日), *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-113 003167/1 1988* (84.doboz); Szűts Pál, i.m., 136.o.
- (25) ハンガリー側の抗議はハンガリー外務省の記録文書 (1988年6月30日), *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-113 003167/1988* (84.doboz).
- (26) キラとの会談に関するハンガリー外務省の記録文書 (1988年8月22日), *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-151 00718/10 1988* (85.doboz).
- (27) ブカレストのハンガリー大使館の本国外務省宛ての暗号電報 (1988年8月25日), *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-13 002402/2* (85.doboz); 社会主義労働者党政政治局の議事録 (1988年8月26日), *MNL OL M-KS 288 f. 5/1034 ő.e.*
- (28) Szűts Pál, i.m., 125-126.o.
- (29) ゴルバチョフ基金が所蔵する1988年7月5日のゴルバチョフ・グロース会談の記録文書 (ハンガリー語訳), Szerk.: Baráth Magdolna, Rainer M. János. *Gorbacsov tárgyalásai magyar vezetőikkel: Dokumentumok az egykori SZKP és MSZMP archívumaiból 1985-1991* [ゴルバチョフのハンガリーの指導者との協議—旧ソ連共産党、ハンガリー社会主義労働者党の公文書館からの資料集 1985-1991年] (Budapest: 1956-os Intézet, 2000), 137-138.o. (以下は、*Gorbacsov tárgyalásai magyar vezetőikkel* と略記。)
- (30) Szerk.: Bodzabán István, Szalay Antal. *A puha diktatúráról a kemény demokráciáig* [穏健な独裁から強硬な民主主義まで] (Budapest: Pelikán Kiadó: 1994), 106.o.
- (31) アラド会談の詳細は、社会主義労働者党政政治局の議事録 (1988年9月6日), *MNL OL M-KS 288f.5/1035 ő.e.*; Szűrös Mátyás, *Szűk volt a*

mundér: Egy magyar diplomata emlékezései és emlékeztetése (1959-2013) [服装はぴったり合っていた——一人のハンガリー外交官の回想と思い出] (Budapest: Püski, 2013), 162-164. o.; Szűts Pál, i. m., 142-159. o.; Földes György, *Magyarország, Románia és a nemzeti kérdés · 1956-1989*, 424-429. o. を参照。なお、筆者が調査した段階では、社会主義労働者党政治局の議事録の一部はまだ未公開であった。フェルデシュと同様、リップ (Ripp Zoltán) もアラド会談でのグロースの卑屈な姿勢を問題視した。Ripp Zoltán, *Rendszerváltás Magyarországon 1987-1990* [ハンガリーの体制転換 1987-1990年] (Budapest: Napvilág Kiadó, 2006), 157-158. o.

(32) Szűts Pál, i. m., 101-102. o.

(33) ゴルバチョフ基金が所蔵する1988年9月8日のザグラジン・ホルン会談の記録文書 (ハンガリー語訳), *Gorbacsov tárgyalásai magyar vezetőikkel*, 231-232. o.

(34) Szűrös Mátyás, *Szűk volt a mundér*, 168. o.; ゴルバチョフ基金所蔵の1988年9月8日のザグラジンと社会主義労働者党元政治局員アツェール (Aczél György) との会談の記録文書 (ハンガリー語訳), *Gorbacsov tárgyalásai magyar vezetőikkel*, 225. o.

(35) Szűrös Mátyás, *Szűk volt a mundér*, 166-167. o.

(36) Kaszás Veronika, i. m., 59. o.

(37) Szűts Pál, i. m., 180. o.

(38) Uo., 181. o.

(39) キラ, トシェフとの会談に関するハンガリー外務省の記録文書 (1988年9月26日), *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-29 003900* (86.doboz); *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-29 003900/1* (86.doboz).

(40) Szűts Pál, i. m., 182. o.

(41) キラとの会談に関するハンガリー外務省の記録文書 (1988年9月28日), *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-29 003900/2* (86.doboz).

(42) エーシによる回答に関するハンガリー外務省の記録文書 (1988年10月3日), *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-29 003900/3* (86.doboz).

(43) コツェフとの会談に関するハンガリー外務省の記録文書 (1988年10月3日), *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-29 003900/4* (86.doboz).

(44) 東欧諸国間でのヴィザ免除協定と旅行者の送還の取極めについては, Oplátka András, *Egy döntés története: Magyar határnyitás-1989. szeptember 11. nulla óra* [ある決定の歴史——ハンガリーの国境開放 1989年9月11日零時] (Budapest: Helikon, 2008), 140. o. を参照。

- (45) コツェフとの会談に関するハンガリー外務省の記録文書（1988年10月4日），*MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-29 003900/6*（86.doboz）.
- (46) コツェフとの会談に関するハンガリー外務省の記録文書（1988年10月26日），*MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-29 003900/8*（86.doboz）.
- (47) ハンガリー・ブルガリア・ルーマニアの外相の間での話し合いは，ハンガリー外務省の記録文書（1988年10月28日），*MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-29 003900/9*（86.doboz）.
- (48) ハンガリー外務省がグロースへの報告のために作成したソフィアの難民問題についての記録文書（1988年12月21日），*MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-29 003900/12*（86.doboz）.
- (49) ポプ，キラとの会談に関するハンガリー外務省の記録文書（1988年11月11日），*MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-29 003900/11*（86.doboz）；スーチとワンチャとの会談は，*MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-29 003900/12*（86.doboz）を参照。
- (50) ハンガリー・ブルガリア間の赤十字を介しての難民問題の協議は，*MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-29 003900/12*（86.doboz）を参照。
- (51) Béla Révész, *op. cit.*, p. 62.
- (52) ハンガリー・ルーマニア双方による参事官の国外退去に関するやり取りは，ブカレストのハンガリー大使館の本国外務省宛ての暗号電文（1988年11月19日），*MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-004487/5 1988*（85.doboz）；ブダペシュトのルーマニア大使館の回答に関するハンガリー外務省の記録文書（1988年11月19日），*MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-004487/6 1988*（85.doboz）；プラトナの国外退去に関するハンガリー外務省の記録文書（1988年11月24日），*MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-004487/10 1988*（85.doboz）.

Hungarian-Romanian Relations (1988): The Refugee Problem between Two Socialist States

Akira OGINO

The aim of this paper is to examine Hungarian foreign policy just before the system change of 1989. Especially the author focuses on how Hungary coped with refugee from Romania.

When more than 11,000 Hungarian minorities in Romania flowed into Hungarian territory in the second half of 1980s, Hungarian-Romanian relations were deteriorating. Hungarian people began a spontaneous protest demonstration against Romanian minority policy in front of the Romanian Embassy in Budapest, February 1988. The Romanian government handed protest notes to the Hungarian Ambassador in Bucharest repeatedly. As a result, the Romanian government ordered Hungarian diplomats to close down the Consulate General in Cluj-Napoca and withdraw from Romanian territory within 48 hours after the protest demonstration in Budapest, June 27.

Károly Grósz, the General Secretary of the Hungarian Socialist Workers' Party, agreed on summit meeting with Nicolae Ceaușescu, the Romanian President and the General Secretary of the Romanian Communist Party, in August 1988. But Grósz didn't succeed in resolving the situation.

Hungarian minorities in Romania applied to the Hungarian Embassy in Bulgaria for protection in September 1988. They were disappointed with the result of the Grósz-Ceaușescu meeting in Arad. The Hungarian government intended to accept them as political refugees after leaving Bulgarian territory. The Romanian government rejected Hungary's proposal and demanded to send them home. In the end, they entered to Hungary by way of Austria through a mediation of the International Red Cross. The Romanian government expelled a counsellor in the Hungarian Embassy as persona non grata. As a result of the problem of refugees in Sofia, two-state relations became worse. Hungary joined Convention Relating to the Status of Refugee to seek

support from international community.

This paper consists of following sections:

1. Introduction
2. Hungarian-Romanian Relations after the Hungarian Revolution of 1956
3. Protest Demonstrations in Budapest against Romanian Minority Policy
4. The Grósz- Ceaușescu Meeting in Arad
5. The Problem of Hungarian Refugees of Romanian Nationality in Sofia.
6. Conclusion

論

説